

Title	一八九〇年から一九一四年にかけてのドイツ労働運動における若干の問題 : W・バルテルの批判
Sub Title	Some problems on the study of history of German working class movement : A Critique on Walter Bartel ; Die Linken in der deutschen Sozialdemokratie im Kampf gegen Militarismus und Krieg, 1958
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.7 (1961. 7) ,p.541(25)- 559(43)
JaLC DOI	10.14991/001.19610701-0025
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610701-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

caetera de talibus rebus breviter debet. (J. -P. Migne, Patrologiae Latinae tomus XCVII. pp. 344-345.)

- (29) Karl Weller, Die freien Bauern in Schwaben. S. 185. 1934.
- (30) Karl Bosl, Die Reichsministerialität der Salier und Stauffer. Teil. 1, S. 41.
- (31) Ernst Klebel, Territorialstaat und Lehen. S. 217. 1960.
- (32) Otto P. Clavdetscher, ebenda, S. 35.
- (33) Die Traditionen des Hochstiftes Freising. S. 230. K. Wührer, Der deutsche Staat des Mittelalters. S. 400.
- (34) Max Weber, Gesammelte Aufsätze zur Sozial- und Wirtschaftsgeschichte. S. 553.
- (35) H. Mitteis, ebenda, S. 63.
- (36) H. Mitteis, ebenda, S. 67.
- (37) Die Traditionen des Hochstiftes Freising. S. 230. K. Wührer, ebenda, S. 392.
- (38) Theod. Jos. Lacomblet, Urkundenbuch für die Geschichte des Niederrheins. S. 3. 1960.
- (39) K. Wührer, ebenda, S. 394.
- (40) K. Wührer, ebenda, SS. 396-398.
- (41) A. Dopsch, Verfassungs- und Wirtschaftsgeschichte. S. 53.
- (42) A. Dopsch, Herrschaft und Bauer. S. 9.

一八九〇年から一九一四年にかけての

ドイツ労働運動における若干の問題

— W・バルテルの批判 —

飯 田 鼎

「ドイツ人民もまた革命的伝統をもっている。ドイツが、他の国々の最良の革命家たちとも肩をならべうる人材を生み出した時代、ドイツ人民が、もし集中した国民の場合だったら、すばらしい結果をもたらしたにちがいない根気と精力とを發揮した時代、ドイツの農民と平民とが、彼らの子孫をしばしばたじろがせるにたるような思想と計画をいだいた時代、そういう時代がかつてあったのである。」⁽¹⁾ エングルスは、「ドイツ農民戦争」の冒頭に、以上のように書いているが、われわれは今日、この文章を更めて味わうべきではなからうか。

ドイツ人の民族的誇り、農民戦争の指導者トマス・ミュンツァや宗教改革の先駆者マルティン・ルッターをまつまでもなく、ドイツ人は十八世紀以来すぐれた文化を創造した。カントにはじまり、シェーリング、フィヒテをへてヘーゲルによって完成された理想主義哲学(観念論)、バッハからヘンデル、ハイドンそしてモーツァルトをへてベートーヴェンおよびブラームスに至る古典的な音楽芸術、レッシング、デーテ、シラーおよびハイネを生み出したドイツ文学、まことに十八世紀か

一八九〇年から一九一四年にかけてのドイツ労働運動における若干の問題

十九世紀にかけてのドイツは、エンゲルスが、その「ドイツ・イデオロギー」のなかで、イギリスやフランスのブルジョアジーに比較して『無力なドイツ市民がなしとげたことは、わずかに善良な意志だけであった』とのべているにもかかわらず、他のヨーロッパの諸民族がなしとげなかった科学的社会主義の建設者マルクスおよびエンゲルスの出現を準備したことに於いて、「文明ヨーロッパの三大国であるイギリス人、ドイツ人およびフランス人」たる光榮を担うものであった。

従ってドイツが革命的伝統をもつという意味はまた、科学的社会主義の理論をもって武装されたプロレタリア階級の政党、社会民主党が、もっとも早く、その姿をあらわし、その後の社会主義鎮圧法の試煉にも耐えて一八九〇年代には、第二インターナショナルを中心とする国際労働運動・社会主義運動に指導的な役割を果たしたという事実のなかに見出されなければならない。

われわれが、ドイツの歴史においてもっとも興味を感じるのは、実はこの一八九〇年から一九一四年の第一次世界大戦の勃発に至る二五年間におけるドイツ資本主義の発展と社会民主党の内部矛盾との関係であって、問題は、ユンカーおよびブルジョアジーを支柱とするドイツ帝国主義政策に対応するものとしての社会民主党内部におけるイデオロギー的分裂、すなわち、改良主義を掲げる修正派と従来の合法主義・議会主義によるマルクス主義の立場を固執する中央派、そしてマルクスおよびエンゲルスの伝統を正しく受け継ごうとする革命的な左派の出現以来、社会民主党は、帝国主義政策（＝最大限利潤追求のための侵略戦争の政策）に抗議しようとする第二インターナショナルの三回にわたる決議（一八九一年リブリュッセル大会、一八九三年リューリヒ大会、一八九六年ロンドン大会）に必ずしも徹底した態度をとることができなかった点に存するのである。ひとつには、一八七〇年から七一年にかけての普仏戦争の結果としてのエルザス・ロートリンゲンのフランスからの奪取を契機として、フランスはロシアに接近してドイツに対抗するという、国際政治上一種の均衡状態がヨーロッパを支配したこともあって、ドイツの社会主義者の間には、「祖国防衛」というのちにインターナショナルナリズムを裏切る結果となった

排外主義が、反動的なツァーリズム打倒という恰好のスローガンと相まって、根強く培われたのであった。その意味では、ローザ・ルクセンブルクが、強調しているように、第一次世界大戦を導き出すところの系譜は、一八七〇年から七一年の戦争のなかに求められねばならない。⁽³⁾

それゆえ、以上のような問題意識の上に立って十九世紀末期から今世紀初頭までのドイツの歴史を顧みるとき、この時代の研究は実に、第一次世界大戦後のドイツ革命の失敗、ワイマール体制のもとにおける相対的安定そしてその崩壊、ついにヒットラーの「第三帝国」という世界史の上でも変転目まぐるしい悲劇の一時期——一九二〇年から三〇年代にいたる——の理解のために不可欠の前提であるといわなければならない。それゆえ、東西両ドイツにおいて十九世紀末から今世紀初頭にかけての研究が非常に盛んであるのは、よく理解できるし、とくにドイツ民主共和国において、労働運動史・社会運動史の面から、この点をとりあげているのは注目すべきである。⁽⁴⁾

一九六〇年八月、ストックホルムで第十一回国際歴史学者会議が開催されたが、そこでのドイツ歴史学者たちの成果は、「ドイツ民主共和国における歴史的研究」(Historische Forschungen in der DDR—Analysen und Berichte)と題し、「歴史科学雑誌」(Zeitschrift für Geschichtswissenschaft)の別巻として公刊されていることは周知のところである。この内容の紹介については、いずれのちの機会にゆずるが、ともかく、ドイツ民主共和国において、帝国主義の矛盾が、もっとも鋭い形ではげしくなっていた一八九〇年頃から一九一四年にかけての社会運動史にかんする研究が、精力的につづけられているが、そのなかには、ひとつのきわ立った特徴がみられることである。ここにとりあげたバルテルの労作もその主要な業績のひとつの典型であるといえよう。ではその特徴とは何か。

バルテルの研究は、「軍国主義と戦争と闘うドイツ社会民主主義左派」と題し六〇〇頁を超える大冊で、その精力的な勉強にたいして敬意を表すべき力作であるが、いまことさらにこの書を取りあげ、その内容を吟味し批判しようとするのは、

以下のような理由からである。すなわち、もしこの研究が、ドイツ社会主義運動史にかんする戦後の主要な業績のひとつであるならば、そのなかには当然、ドイツ民主共和国における研究の方向や問題意識が明瞭に反映していると思われるからであり、また事実筆者は、これを読みつつ、このことをもっとも強く意識したのであった。

筆者はまだドイツ労働運動史や社会運動史の研究に志して日も浅く、従って研究動向などについて、はっきりとしたものを把握するほどまでにはいっていないが、ただ夥しい出版物を注意深く見まもるだけでも、労働運動史研究の方法論に、何か公式主義的な傾向が色濃く認められるような気がするし、それがまたドイツ民主共和国における労働運動史研究の特徴でもあり、欠陥をも形づくっているようである。この仮定が妥当なものであるとして、筆者が、このバルテルの研究を通じて、論じようとするところのものは、主として戦後のドイツ労働運動史研究にあらわれた成果と欠陥が何であるか、すなわち、エンゲルスのいわゆる「ドイツ人民の革命的伝統」を高く評価しようとする傾向のなかで、却ってそのために教条主義・公式主義におちいってゆかざるをえないのは何故か、この点について追求してみたいと思う。

(1) エンゲルス「ドイツ農民戦争」、マルクス・エンゲルス選集第十六卷(大月版)一頁。

(2) エンゲルス「初期の共産主義的宣伝活動」、マルクス・エンゲルス選集第一卷一二二頁。

(3) Rosa Luxemburg: Ausgewählte Reden, Bd. I, SS. 286-287.

(4) 十九世紀末期から今世紀初頭にかけての労働運動を主題としたもので、最近のものでは、じきものが注目をひく。西独では Max Koch; Die Bergarbeiterbewegung im Ruhrgebiet zur Zeit Wilhelm II. 1954. Gerhard A. Ritter; Die Arbeiterbewegung im Wilhelmischen Reich. — Die Sozialdemokratische Partei und die Freien Gewerkschaften 1890-1900, 1958. Karl Jantke; Der Vierte Stand — Die Gestaltenden Kräfte der Deutschen Arbeiterbewegung im 19. Jahrhundert, 1955. がより、ドイツ民主共和国では、Walter Sieger; Das erste Jahrzehnt der Deutschen Arbeiterjugendbewegung 1904-1914, 1958. Kurt Stenkevitz; Gegen Bajonett und Dividende, — die Politische Krise in Deutschland am Vorabend

des ersten Weltkrieges, 1960. などがある。

(5) この会議の様相については、労働運動史研究会編集「労働運動史研究」一九六一年一月号所収の塩田庄兵衛氏とステパノウ女史の報告にくわしい。

(6) 「労働運動史研究」一九五九年七月号所収「九州大学における西洋労働運動史研究」のなかで、小林栄三郎教授は、「総じてこの時期の労働者の状態にかんする東独の研究は、たぶん公式的でこちらの知りたい肝心のところが抜けている感があり……、西ドイツの方がかえって実証性に富む研究書を出していますが、これはまた問題意識がずいぶんわれわれと食いちがっていて困ります」とのべておられるが全く同感である。

二

本章は、十章から成っている。

第一章 一九一四年から一九一九年にかけての世界大戦の起源について。

第二章 戦争は、不可避にされた。

第三章 一九一四年八月四日と社会民主党。

第四章 ドイツ社会民主党左派、独立のグループを形成する。

第五章 煽動から行動へ。

第六章 主要な敵は、自国のなかにいる。

第七章 社会排外主義政策は、大衆の行動力を無力にする。

第八章 ロシア革命の影響。

第九章 一月ストライキ——国民的な行為

一八九〇年から一九一四年にかけてのドイツ労働運動における若干の問題

目次をみれば明らかなように、本書は、第一次世界大戦の勃発から、社会民主党の分裂以後、ローザ・ルクセンブルクおよびカール・リープクネヒト等による左派の独立の革命的政党としてのスパルタクス団の結成から、ロシア革命以後におけるその革命的蜂起の失敗までの、ドイツ現代史におけるもっとも悲壮な一時期を、豊富な資料をもって生き生きと描写したものであって、その限りでは、これらの英雄的な指導者の行動や思想などが克明に追求されており、読む者をひきつけずにはおかない。とくに、カウツキーの日和見主義への移行についての分析には注目すべきものがあるが（95頁以下）、しかし、本書を読むにつれて、筆者はつぎのような疑問をもつに至った。すなわち、

(一) 著者は、第一次世界大戦勃発時における労働者階級の動き、とくに労働組合の役割をどのように評価するか。
(二) その場合、労働組合内部の分裂の様相はどのようなものであったか。社会民主党内部においてカウツキー主義によって代表される日和見主義的な指導者と労働貴族層との関係、

(三) ローザ、リープクネヒト等の革命的な左派を支持している階層的基盤——不熟練もしくは半熟練労働者・失業者を底辺とし、その上に立つ労働組合の尖鋭な分子と労働組合との関係はどうであったのか。

(四) 意識のおくれた労働者、すなわち農業労働者、中小企業労働者の状態。

以上のように、ドイツ社会民主党左派の形成過程のなかでもっとも問題とされる日和見主義＝機会主義の本質とは何か、日和見主義が党内部で支配的となったという事実は、当然「下から」これを支持する階層が前提とされねばならない。とくにその階層的基盤、従って労働組合内部における矛盾と分裂の進行など、これらの問題について焦点をしばりながら、本書の内容に接近するとともに、その矛盾や欠陥にもふれてゆくことにしよう。

著者はまず、「ドイツ経済発展の特殊性」(Die Besonderheiten der deutschen ökonomischen Entwicklung)と題し五項目

にわたって、ドイツ帝国主義形成の基盤とその特殊性とを指摘している。それを要約してみれば、

(一) フランス・プロイセン戦争における広汎な市場の創出と、さらにその勝利の結果獲得された賠償金五〇億フランがルール工業地帯へ借款として投資されることにより、ドイツ独占資本主義の中核としての重工業は、鞏固な基礎をきずいた。

(二) それにもかかわらず、依然として根強い封建的残滓、小国分立、国民的な統一の欠如、こうした特徴的な事実は、ドイツの工業国への途を阻むものではあったが、鉄道網の整備、飛躍的な産業発展の結果としての大規模な住宅建設ののちは、大工業の急速な発展がみられた。

(三) 国内産業における異常なほどの低賃金、カルテルおよびトラストによるドイツ国内における独占価格の維持および関税障壁を通じて、先進資本主義国との競争力の強化を実現した。

(四) 低賃金の基盤としての農村、レーニンによって規定された古典的な理論、「資本主義発展の二つの途」の「プロイセン型」と呼ばれたように封建的＝領主経済からユンカー的・ブルジョア的な経営への移行にともない、多くの小農民は没落して、少数の大農業経営者のもとに収奪され、隷属化されていった。一八八二年から一九〇七年までの間に、農業従事者の数は、四〇パーセントから二七・一パーセントに減少し、逆に工業においては三五パーセントから四二・一パーセントに増大した。また全農業経営の〇・四パーセントをしめる二三、〇〇〇のユンカーの家族が、全農地面積の四分の一をしめた。農業における半封建的な関係を利用し、劣悪な労働条件を強制するユンカーの支配にたいする抵抗としての労働移動の現象、とくに工業地帯への農民の移動は、農業部門における深刻な労働力不足をもたらし、農業の危機、従ってドイツ独占資本の強力な支柱としてのユンカーの経済的な基盤を危機におとしめるものであった。

(四) ここにおいてこの危機を回避するために、夏期の間ポーランド、ガリツィエン（ポーランド南部）およびイタリアの一

部から季節労働者を移入せしめたのであって、これらの全く無権利のしかも極端に低い賃金を支払われた農業季節労働者の流入は、一方において絶えず、相対的過剰人口を滞留せしめることを通じて、ユンカーの地位を強化するとともに、農業および工業における労働者階級の闘う力を弱める役割を果し、他方、ドイツのブルジョアをして、その圧力のもとに低賃金政策を維持せしめ、海外への膨脹政策を遂行させたものである (SS. 27-30)。

著者バルテルが、ドイツ資本主義発展の特殊性として以上の五項目にわけて追求しているなかでも、とくに重要視すべきものは、主としてポーランドおよびイタリアからの農業季節労働者の問題であろう。これについては最近、ニヒトワイスの注目すべき研究がある⁽¹⁾ (Johannes Nichtweiss: Die ausländischen Saisonarbeiter in der Landwirtschaft der östlichen und mittleren Gebiete des Deutschen Reiches, 1890-1914, 1959)。⁽²⁾ この点の指摘とならんで著者は、ドイツ独占資本の侵略主義的傾向、そのもつとも典型的なものとしてのバルカン・中東諸国・東南アジアおよび南アフリカそしてモロッコにおける植民地獲得のための英・仏とのはげしい争い、そしてこれらといわば裏腹の関係にある秘密外交政策について、きわめて詳細に描写している (SS. 40-67)。

こうしたドイツ帝国主義の侵略的政策は、一八九九年のボア戦争、一九〇四年の日露戦争などの一連の帝国主義戦争につづいて、大規模な世界戦争を誘発させるもつとも危険な要素であって、とくに一九〇五年〜七年にかけての第一次ロシア革命は、革命運動の激化に脅える支配階級をして、反動的政策—帝国主義的な利益の追求には相互に敵対し、戦争の危険をさえ冒しながら、社会主義運動の弾圧にたいしては比類なき国際的連帯の精神を保ったことはよく知られている⁽³⁾。

ところでこのような戦争と社会主義運動の弾圧の危機にたいして、ローザやリープクネヒト等の活潑な反戦運動が展開され、そしてまた戦争の危機が深まれば深まるほど思想的にも戦術的にも、社会民主党内部の対立が明瞭になり、いわゆる左派・中央派そして右派の派閥抗争が激化するわけであるが、筆者が最初に提出しておいた問題提起に従って、著者バルテル

の見解を検討してゆこう。

(1) 三田学会雑誌第五十四巻、第三号拙稿「十九世紀末期から二〇世紀初頭にかけてのドイツ帝国東部および中部における農業季節労働者の状態」参照。

(2) Die Auswirkungen der ersten Russischen Revolution von 1905-1907 auf Deutschland, herausgegeben von Prof. Dr. Leo Stern, 1955, Bd. II, SS. 14-15. (Aus den Reichstagsreden des Reichskanzlers von Bismarck und der Abgeordneten Bebel und Liebermann von Sonnerberg am 5. April 1906.) (三田学会雑誌第五十三巻第二号拙稿参照)。

(3) Eibenda, Bd. I, S. 19 (Nr. 3 der Quellen; Geheimabkommen verschiedener europäischer Staaten zwecks einheitlicher Überwachung der „anarchistischen“ Bewegung. St. Petersburg, 1./14. März 1904.

III

われわれは、さきに指摘した問題を意識しつつ著者バルテルの革命的な左派の役割についての評価をとりあげるならば、つぎのような文章が注目をひくであろう。すなわち、

「リープクネヒトが、一部の執行部の意志に反して、その無条件の必要性を確信して、ドイツにおける独立の社会主義的・反軍国主義的組織の結成を援助したは、彼の歴史的な功績に属する」(S. 69)

青年労働者の運動にたいし、リープクネヒトがあたえた影響、その運動における比類なき役割については、すでによく知られており、また最近では、ウォルター・ズイーガーの研究⁽¹⁾などがあって、ローザやリープクネヒト等の革命的な社会主義者の運動が、かなり広はんな地域にわたって社会民主党の青年党員や社会主義者の勤労青年、あるいはまた労働組合の青年部員から相当の支持と信頼をえていたことがわかる。しかしそれだからといって、リープクネヒトらの活動が労働者階級の強力

一八九〇年から一九一四年にかけてのドイツ労働運動における若干の問題

な支持をえていたという具体的・積極的な証拠にはならないし、またもし得ていたとしてみてもどのような職種の労働者であるかが問題となる。この意味で、著者は労働運動における「指導者と大衆」との関係を究明するのに全く成功していない。つまり、著者が最初に問題を提起しておいたように、第一次世界大戦という一大深淵を前にして、はげしくなる階級的対立と抗争、第一次ロシア革命にみられる体制的な危機感、苛酷な弾圧のなかで、労働者階級内部における深刻な動揺や分裂が必ず発生しなければならぬし、そうした過程のなかではじめて、左派、中央派および右派などの分裂の必要性と本質が明らかにならなければならないのに、いわゆる「勤^{ラクトン}労^ド大^コ衆^ン」^{ラクトン}についてはまったくふれられていないというのは一体どうしたわけであろうか。とくに、ドイツの場合はイギリスと異なって、労働組合と社会民主主義政党との関係が、政党の優位すなわち政党政策の組合支配という傾向が、早くから濃厚であり、それ故また労働組合の色わけが、たとえば、「キリスト教」労働組合もしくは「ヒルシュ・ドッカー的」組合というように、比較的はつきりしていたのであった。ところが、バルテルの場合は、こうした労働組合内部の錯雑した問題や勢力関係、そして、それと政党との関係にはまったくふれず、大戦を不可避ならしめた責任を、もっぱら日和見主義者、すなわち中央派の指導者ベーベルおよびカウツキーに帰せしめることだけに論点を集中している。もちろんベーベルおよびカウツキーの日和見主義・機会主義への移行、とくにカウツキーの思想と行動とは、レーニンによって徹底的に非難されたように、「階級的な裏切り」、「インターナショナルイズムの拋棄」であったことはいうまでもないが、彼らのその行動を指摘することと、何故彼らがそのような背信行為を犯さねばならなかったかということの客観的な分析とは、おのずから別の問題でなければならぬ。カウツキーやベーベルをして中央派（「合法マルクス主義者」）にとどまらしめた所以は、もちろん彼ら自身の責任としても、やはり労働者階級のかなりの部分が、これを支持していたからではなかったろうか。とりわけ、ベーベルを批判して、「明らかにベーベルは、ドイツ帝国主義者の戦争の意図を過小評価し、非合法化を恐れた」^(S. 20)とのべ、さらに、つぎのようにのべているのは、理論的・分析的ではな

く、公式主義的な規定の仕方であるといわなければならない。すなわち、

「ひと握りの労働者層の上昇せる生活水準に幻惑され、絶えず増大する議会の影響の幻影にとらえられた機会主義者たちは、ブルジョアジーと国家との妥協的政策を熱望していたのである」^(S. 20)

すなわち、ここで考えなければならないことは、ひとつは黎明期の労働運動以来、ウィルヘルム・リープクネヒトとともにドイツ労働運動の発展のために偉大な役割を果たしたベーベル、「パパ、ベーベル」という愛称をもって親しまれたベーベルが、当時の労働者階級から獲ちえていた圧倒的な支持と信頼であり、いまひとつは、一八九〇年代の経済恐慌の時期における「自由労働組合運動」の発展である。ベーベルが、ドイツ労働者階級が社会主義鎮圧法のもとに弾圧されていたとき、ウィルヘルム・リープクネヒトとともに、社会民主党の組織を壊滅からまもるために、合法・非合法のあらゆる手段を駆使して闘ったことは、フリードリッヒ・エンゲルスも高く評価していたところであった。一八九〇年代にドイツ帝国主義の内包する矛盾がはげしくなり、労働貴族層の増大にともない、そのイデオロギーとしての改良主義が登場し、ここにいわゆる修正主義論争が党の性格にかかわる重大な問題としてひきおこされたとき、ベルンシュタインにたいして、カウツキー、ベーベル等は、いわゆる正統派マルクス主義者としての立場から、マルクス以来のプロレタリア階級の党としての社会民主党の古い伝統を擁護するのにとめたのであって、労働者大衆の彼らにたいする信仰ともいべき信頼が、牢固として抜くべからざるほどのものであったことは想像に難くない。二〇世紀に入り、帝国主義戦争の危機が、すでに指摘したようにバルカン・中東もしくはモロッコなどの植民地獲得の闘争を通じて、次第に不可避なものにみえはじめ、このような状況を反映して社会民主党内部にも、「プロレタリア国際主義」を放棄して「祖国防衛」をとなえる右派（「改良主義者」）の勢力が強くなったとき、カウツキー、ベーベル等の態度が、かつての社会主義鎮圧法下における苛烈な闘争のゆたかな経験を生かすことなくあるいはまた、ベルンシュタインの改良主義にたいして、ローザ等と共同して、社会民主党の「光栄ある」伝統を擁護

したその革命的社会主義者としての貴重な教訓を学ばず、次第に日和見主義者の立場に接近するに至ったのは、やはり、勤労大衆のペーベル、カウツキーにたいする信仰が、それほど急速に衰えなかったという事実によるのではなかったろうか。つまりカウツキー、ペーベルが中央派として左右両派の間を終始動揺しつつづけることができたのは、半ばは彼らが過去に築き上げた労働運動の先駆者・老練者としての輝かしい功績によるものであり、他はその当時のお労働者大衆の胸に、かつての勇敢な闘士としてのイメージが残像として焼きつけられていたばかりでなく、実際に支持をえていたためであったというほかはない。然るに著者はこのような点にはまったくふれずに、ただ、中央派を裏切り者、日和見主義者、あるいは機会主義者などと規定しているのは、いささか公式主義のそしりをまぬかれることができないばかりか、日和見主義の本質そのものを解明する何らの手がかりをも提供するものではない。そこでわれわれは、このようなバルテルの公式主義的な規定にたいする批判として、一八九〇年、ビスマルクの退場と社会主義鎮圧法撤廃以後のドイツ労働運動の発展を概観し、そのなかで、中央派(ペーベル・カウツキー)の日和見主義移行の基盤がどこにあるかを検討することにしよう。

一八九〇年以後の労働組合運動の発展の過程で、いちじるしい特徴とみられる事実は、重工業のみならず、家内労働や手工業に基礎をおく軽工業部門にも労働組合が急速な勢いでその勢力を伸張したことであった。すなわち、一八九〇年、印刷労働者の五三パーセントをしめる全ドイツ印刷工組合(Verband der Buchdrucker Deutschlands)が結成されたのをはじめとして、手袋製造工の組合(七六・七パーセント)白鞣匠(六七パーセント)彫刻師(五九パーセント)、銅細工師(三七パーセント)、煙草精選工(三二・五パーセント)というように、軽工業部門における組織率は、急速なテンポをもつてのびていった。⁽⁴⁾ いうまでもなく労働組合にたいする資本の攻撃の集中点は重工業であり、第一次世界大戦勃発の年一九一四年までには、金属、木材、建築、運輸、繊維産業、製造業の六巨大組合が、組織された労働者の約六〇パーセントをしめていたといわれるが、このほかに特異な存在を誇る鉾山労働者の組織がある。

一八九〇年九月、ハレーにおいて最初のドイツ鉾山労働者の大会(Deutsche Bergarbeitertag)が開かれた。このときは、この団体は必ずしも社会民主党の集会とは考えられなかったといわれているが、⁽⁶⁾ 一八九一年の春、ストライキが勃発し、約二〇、〇〇〇人の労働者が争議に参加したが、このとき、「グルック・アウフ」(Glückauf)、「御安全に」という炭坑夫の挨拶を意味する⁽⁷⁾と称する首脳部とくにステッツェル(Gerhard Stötzel)やフスアンゲル(Johannes Fussangel)らの一団に指導された労働者が争議に反対したため、炭坑労働者の敗北に終わった。⁽⁷⁾ こうした社会民主党の指導のもとに立つことを拒否する保守系の組合主義者とくにオットー・ヒュー(Otto Hue)と彼に追隨する人々は、労働組合の政治的中立性を強調し、政治的・宗教的な問題は、労働者の組合の内部において論じられるべきではないとして、労働組合運動の社会民主党からの影響を極力排除しようとした。もちろん、この労働組合の政治的中立性の思想は、社会民主党系の「自由労働組合」にたいして、必ずしも十分な浸透を期待することができず、たとえば、煉瓦労働者、木材労働者やその他多くの組合は、これを拒否したといわれる。だがそれにもかかわらず、すでにカール・レギエン(Karl Legien)やヘルム(A. von Elm)らはその思想の洗礼をうけ、当時の労働組合運動における決定的指導者であったアウグスト・ペーベルの胸のなかにも、このような思想の定着をみたことは注目されなければならない。⁽⁸⁾ こうした雰囲気の中に、キリスト教鉾山労働者組合の勢力の進展をみたことは不思議ではない。⁽⁹⁾

では炭坑労働組合のみならず、ドイツ労働運動全体の流れのなかに、社会民主党に指導され、その理念のもとに行動していた「自由労働組合」と「キリスト教系の労働組合」、そしてさらにヒルシュ・ドゥンカーの労働組合のような各派が分裂しなければならなかったのは何故か、その理由として、われわれは、バルテルが指摘するように、あるいはバルテルのみならずドイツ民主共和国の研究者に共通な規定の仕方として、指導者の「右翼日和見主義」、「機会主義」という簡単な論法で、納得することはできない。つきにかかせる表(第一表)によって、今世紀初頭における反社会民主主義的な組合の発展を

(第一表)

年次	自由労働組合	ヒルシュ・ドゥン カー労働組合	キリスト教労働組合
1890	227,733	62,643	—
1891	227,659	65,588	—
1892	237,049	45,254	—
1893	223,530	61,154	—
1894	246,494	67,078	—
1895	259,175	66,759	5,500
1896	329,230	71,767	8,055
1897	412,359	79,553	21,000
1898	493,742	82,755	34,270
1899	580,473	86,777	56,391
1900	680,427	91,661	76,744
1901	677,510	95,057	84,497
1902	733,206	102,561	84,667
1903	887,698	110,215	91,440
1904	1,052,108	111,889	118,917
1905	1,344,803	116,143	191,690
1906	1,689,709	118,508	260,040
1907	1,865,506	108,889	284,649
1908	1,831,731	105,633	260,767
1909	1,832,667	108,028	280,061
1910	2,017,298	122,571	316,115
1911	2,320,986	107,743	350,574
1912	2,530,390	109,225	350,930
1913	2,548,763	106,618	341,735
1914	2,521,303	77,749	218,197

一八九〇年代に至って完成した石炭業および鉄鋼業における巨大独占体の形成——ライン・ウェストファールン石炭シンジケート、ライン・ウェストファールン鉄鉄シンジケートの結成、レーニンの表現をかりるならば、「カルテ

みてみよう。⁽¹⁰⁾

ルが全経済生活の基礎のひとつとなり、資本主義が帝国主義に転化する」という段階では、その巨大トラストに働く労働者や事務員——いうまでもなく労働者階級全体の数からみればきわめてわずかであるが——たとえばレーニンによればドイツ鉱山業最大の企業であるゲルゼンキルヘン鉱山会社(Gelsenkirchener Bergwerksgesellschaft)には、一九〇八年に、四六、〇四八人の労働者と事務員が働いていたといわれ、その結果は、これらの巨大独占体に働く人々は労働者階級の上層部分としての労働貴族として、本来のプロレタリア的下層との間に区別をもうけることを余儀なくされる。こうした労働貴族層の形成は、老大な植民地領有と世界市場における独占的地位を享受していたイギリスの場合がもっとも典型的にあらわれた

(第二表)

年代	1871	1880	1885	1890	1900	1905
デュッセルドルフ	5,205	10,573	14,584	22,451	60,765	87,941
アルンスベルク	4,597	16,246	24,332	38,627	99,997	126,382
ミュンスター	940	2,048	3,858	8,764	27,691	39,645
ルール地帯	10,742	28,857	42,774	69,842	188,453	253,968

(第三表)

年代	全従業員	これらの中で東部諸州からの鉱山労働者	全従業員との比率
1893	158,306	39,388	24.88
1897	184,589	—	—
1900	204,298	69,698	34.11
1902	248,233	77,675	31.29
1904	272,323	87,967	32.30
1905	281,599	94,873	33.69

以上のように、ルール地帯を中心とする地方への東部諸州からの労働者、とくに農業部門からの流入は、炭坑業における低賃金構造を固定化し、賃金格差を拡大し、労働貴族層の形成とともにこれとは比較にならないほどの低賃金労働者をも排出せしめることとなる(第四表)。第四表をみるに、一級の労働者は、一八七八年に週給二・六六マルクであったものが、それから一三年後の一八九一年には四・〇八マルクと六五パーセントの賃金上昇であったのに反し、二級の労働者は約二六パーセント、三級の労働者は約四六パーセント、そして四級の労働者の場合には、わずかに六パーセント弱の上昇にすぎなかった(但しこの場合、一級労働者とは、本来の採炭夫、二級は、地下労働者——たとえば運搬夫、制動手など、三級とは、地上労働者、そして最後に四級労働者とは、

を雄弁に物語っているといえよう。

が、とくにドイツの場合は、まったく組織されていない移民労働者が大量に流入することを通じて、その低賃金に支えられて、組織労働者全体が、あたかも特権的な存在であるかの如き観を呈するに至った。第二表は、一八七一年から一九〇五年までの間において、東プロイセン、西プロイセン、ポーゼンおよびシュレジエンの諸州からのデュッセルドルフ、アルンスベルク、ミュンスターおよびルールなどの重工業地帯への労働移動の現象を示している。とくに、そのなかでも、ドルトムントの鉱山監督区における鉱山従業員のうち、東部からの移住労働者の増加率は、一八九三年を一九〇〇とした場合、一九〇五年には一四〇・九パーセントであったといわれる。第三表は、この事実

一八九〇年から一九一四年にかけてのドイツ労働運動における若干の問題

(第四表) 単位マルク

年代	一級	二級	三級	四級
1878	2.66	2.13	2.24	1.05
1879	2.55	2.05	2.20	1.01
1880	2.70	2.09	2.20	1.02
1881	2.79	2.10	2.24	1.02
1882	3.01	2.20	2.30	1.04
1884	3.08	2.24	2.36	1.06
1885	3.04	2.22	2.39	1.06
1886	2.92	2.17	2.35	1.00
1887	2.92	2.14	2.37	0.99
1888	2.96	2.34	2.36	1.01
1889	3.42	2.60	2.57	1.12
1890	3.98	2.93	2.82	1.23
1891	4.08	2.95	2.85	1.23

青年労働者であった。そしてそれらの割合は、一八九〇年までに二級および三級が、全従業員の各二〇パーセント、一級が六〇パーセント弱、四級は四パーセントないし五パーセントをしめていたといわれる。⁽¹⁵⁾

鉱山労働者の場合にみられたこのような階層分化は、その他の部門の労働者の場合にも、多かれ少なかれ認められた現象であって、とりわけ鉱山労働者の場合、青年労働者の労働条件は劣悪であり、一八八九年のルール地帯における鉱山労働者のストライキの如きは、青年層の不満が発端となつて勃発したものであった。そして一八九〇年代から一九一四年までのドイツ帝国主義の爛熟期において、独占体や老大な官僚機構に奉仕すべきにうした青年労働者——教員、商店員、農夫、下級官吏などをふくむ——を

どちらの側にひきつけるか、ブルジョア的な青年運動のなかにその革命的な情熱を稀薄化せしめるか、もしくはプロレタリア社会主義の理論を注入することを通じて、帝国主義と軍国主義に反対する勢力たらしめるか、社会民主党にとって実に緊急の問題となった。そして後者こそリープクネヒトに課せられた歴史的な使命であった。

以上において指摘したように、一八九〇年代から一九一四年までのドイツ帝国主義の矛盾がもつとも激化した段階において、労働運動には、つぎのようないくつかのきわだった諸特徴がみられたのである。すなわち、

(一) いわゆる正統派マルクス主義者（カール・カウツキー、アウグスト・ベーベル）を中核とするドイツ社会民主党の指導のもとにあった自由労働組合運動の発展、そしてこれとは対照的に、保守的なヒルシュ・ダウンカー的労働組合や、反動的なキリスト教系の労働組合の勢力の伸張。

(二) 一八九〇年代に至って完成したルール地帯を中心とする独占の形成にともなう資本の攻勢の激化、そしてその超過利潤の「わけまえ」にあずかる労働貴族層の発生、それと同時に移民労働者の大量の流入によって、極端な低賃金を強いられた不熟練な青年労働者の左翼化。

(三) かくして社会民主党内部における日和見主義の発生は「自由労働組合」内部における左右両翼への分解の反映であったこと。

これを要するに、ドイツ社会民主党の支柱としての「自由労働組合運動」を掌握していたベーベルとカウツキーをして、合法マルクス主義からさらに日和見主義に接近せしめたものは、裏をかえせば、中央派に反対する左翼社会民主主義者が、労働組合運動において決定的な影響力をもつことができず、彼らが炭坑労働者をはじめ鉄鋼・金属労働者を中心とする組織労働者の中核に肉迫し、これに支配的な影響をあたえることができなかったこと、そしてわずかに半失業者、不熟練労働者および青年労働者を組織したにとどまったという事実によるものであることもまた疑いえない。なぜ、そうならねばならなかったか、問題はこの点にある。これについて、ワルター・ウルブリヒトが、つぎのようにのべているのは当時の事情を物語っている。

「ロシアとは対照的に、ドイツにおいては、十九世紀から二〇世紀への転換期の帝国主義の時期の始めに、社会民主党労働組合および同業組合の強力な組織が存在していた。しかしながらこれらのあらゆる組織のなかで、右翼機軸主義的な一団が決定的な影響をもっていた。社会民主党の組織は、一種の選挙団体であって、そのなかでは、党員数の過大評価のイデオロギーが支配的であった。それらは、選挙によって、より高い投票数の獲得と平和的な貫徹を目指していたのであった」⁽¹⁶⁾（傍点筆者）

これはたしかに事実であるが、ではなぜそうならなければならなかったのかという点になると、必ずしも明らかにされ

ず、ただ日和見主義者、裏切り者、機會主義者の背信のためであるという「お定まり」の結論がでてくるにすぎない。そしてドイツ労働運動の歴史上、一九一四年の第一次世界大戦の勃発後、闘いのあらゆる重大な局面においてさえ、このような日和見主義者、裏切り者という断定が横行し、そのために、却って日和見主義・機會主義の本質が曖昧にされ、何故にそれを防ぎえなかったかという真摯な理論的反省を欠く結果、ドイツ民主共和国における歴史研究、とくに労働運動史研究の方法は、勢い公式主義に流れざるをえない。これはひとりここにとりあげたバルテルの研究に特有なものではなく、クチンスキーなどにもっとも典型的にみられる⁽¹⁷⁾。

筆者は以上の試論において、一八九〇年代から一九一四年の第一次世界大戦に至る時期におけるドイツ労働運動史研究において、もっとも重要な問題とみられる日和見主義の発生の歴史的意義について、バルテルの著書を批判しつつ、展開してきた。資料的な裏づけが不十分なため、臆測にもとづく大胆な規定によって、必ずしも正しい見解とはいえないかもしれない。ともあれ労働運動史の研究は、歴史研究の本来の姿としてたんに「かくありき」という事実の探求のみにとどまってはならないことはいうまでもない。労働者階級の生活条件の維持および改善をしてその解放のための教訓を学ぶことに、その目的が秘められているとすれば、何よりもまず客観的に事実を評価することが必要であり、それゆえ主観的な側面だけを重視することの誤謬は、運動の主體的な弱点を克服するために、重大な障害となるであろう。ドイツ民主共和国における労働運動史研究において、われわれがもっとも注意しなければならないのは実にこの点である。

(17) Karl Liebknecht, Lehrer und Freund der Jugend, mit Beiträgen von Wilhelm Pieck, Karl Eduard Ullmann, 1954. Berlin. SS. 43-74.

(18) Walter Sieger; Das erste Jahrzehnt der deutschen Arbeiterjugendbewegung. 1904-1914, 1958.

(19) Fred Oelssner; Rosa Luxemburg, eine kritische biographische Skizze, 1952. S. 74. 杉山純平訳「ローザ・ルクセンブルグ——その生涯と業績」(理論社、一九五五年)八三頁。

ルク——その生涯と業績」(理論社、一九五五年)八三頁。

(4) Gerhard A. Ritter; Die Arbeiterbewegung im wilhelmschen Reich, 1959, S. 110.

(5) Ritter; ebenda, S. 113.

(6) Max Koch; Die Bergarbeiterbewegung im Ruhrgebiet zur Zeit Wilhelm II. 1954, S. 54.

(7) Koch; ebenda, S. 55.

(8) Koch; ebenda, S. 58.

(9) Günter Griep; Zur Geschichte der deutschen Gewerkschaftsbewegung, 1890-1914, 1961, S. 47.

(10) シューアの掲げたる目的である。

(11) ベーニンの「帝國主義論」(宇高基輔訳(岩波文庫一九六一年)三九頁)。

(12) マックス・ホルホの掲げるとする目的である。Max Koch; ebenda, S. 20.

(13) 同(11) (Koch; S. 20)

(14) 同(11) (Koch; S. 17)

(15) Koch; S. 17.

(16) Walter Ulbricht; Zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung, 1955, Bd. I. S. 11.

(17) Jürgen Kuczynski; Der Ausbruch des ersten Weltkrieges und die deutsche Sozialdemokratie, Chronik und Analyse, 1957.